

ベトナム戦争と帰還兵詩人

When power corrupts, poetry cleanses.

— J. F. Kennedy, 1963

白井洋子

はじめに

ベトナム戦争は、米国史上のどの戦争よりも多くの小説や映画の題材として取り上げられた戦争である。なかでもこの戦争から数多くの詩が生まれたこと、それらの詩のほとんどが帰還兵士による作品であることも、他に類を見ない。本稿では、なぜベトナム戦争は多くの詩人兵士を生み出したのか、なぜ詩なのかを、帰還兵士の作品を紹介しながら、考察する。戦場での殺し合いから生き延びて帰国した兵士たちはこの戦争をどのように捉えていたのか、また、敗戦後の米国社会が抱える国民的トラウマの渦中に巻き込まれながら、帰還兵たちが自己のベトナム体験の先に見ていたものは何だったのか。かれらの戦場体験から生み出された詩を通して、兵士の目線からの「ベトナム」論、アメリカ論を探ってみたい。

ベトナム戦争と戦争文学について考えるとき、ベトナム戦争が何よりも数多くの詩、それも陸軍や海兵隊の地上戦闘員による作品を生み出してきた事実を無視する訳にはいかない。そのことは、この戦争が、従来考えられてきた戦争文学の概念を大きく変えることになったこととも密接に関連している。On Native Ground (1942、邦訳『現代アメリカ文学史』1964) を著した文芸批評家のアルフレッド・ケイジンは、「戦争文学が偉大であった時代は、1920年代のヘミングウェイとその世代の作家たちで終結した」と言い、第二次世界大戦の文学については「本質的には芸術的であるよりも、むしろ記録的なものだ」と結論づけている。第二次大戦を描いた作品が記録文学的要素を強くしてきたとなると、それから20年ほどのちに本格介入が始まるベトナム戦争の書き手たちの多くがジャーナリストであったことに何の不思議もない。直接の戦闘員ではない戦争観察者が描く戦争報道が文学的要素をも取り込みながらさまざまなメディアを介して本国に発信されていった一方で、戦場での悲痛な体験、恐怖、絶望を、兵士たちは記憶として脳裏深くに沈殿させていった¹⁾。こうした兵士たちの個人的な感情は、帰還後、自分たちを温かく迎え入れてくれるはずだった社会や家族からも疎外されることで、心の叫びとなって詩、あるいは自伝的小説や手記の形式をとり、帰還兵士の会誌や個人詩集に文字となって吐き出されていったのである。ベトナム戦争からは、芸術性に溢れ、文学的にも洗練された壮大な、いわゆる「偉大な戦争文学」が生まれなかったと言われるが、それは書き手たちの多くが、戦争観察者ではなく、戦闘の当事者、それも生身の人間として殺し殺されるという血みどろの地上戦をくぐり抜けてきた陸

軍歩兵や海兵隊員たちであったことによる。ケイジンが、ベトナム戦争の文学性は、南北戦争やヘミングウェイの描いた世界大戦に見られるヒロイズムとは異なり、「完全に別種の主題」にあると指摘していること、ベトナム戦争を扱った文学に繰り返し語られているのが戦闘員の体験した戦争の恐怖であると述べていることは、まさにベトナム戦争文学とはこの戦争を兵士の視点から書いたものであると言っていることに他ならない²⁾。

帰還兵詩人の誕生

*Winning Hearts and Minds: War Poems by Vietnam Veterans*という題名の、帰還兵士の作品を収めた詩集が出版されたのは、1972年春、戦争終結の3年前のことである。この詩集は兵士による詩集の最初のものではないが、今日では帰還兵士の詩を語る上での古典と言われるほどの位置を占めている。“Winning Hearts and Minds”とは、ベトナム民衆の心を掌握するという意味であり、南ベトナムでの米国軍隊による平定作戦を形容する標語として、合衆国政府と軍部が繰り返し用いた言葉である。Larry Rottmann, Jan Barry, Basil Paquetの三人の編者はいずれも帰還兵で、この詩集には編者を含めて33名の作品106篇が収められている。そのうちの2篇が女性によるもの、1篇が北ベトナム兵士の作品である。作品の大半は詩作の技巧や洗練さに欠け、生の感情をそのまま表現しただけの詩集と言われているが、この詩集の刊行が、のちに編者を含めて高い評価を受けることになる帰還兵詩人の輩出に重要な役割を果たしたことは事実である。

ベトナム戦争詩の特徴の一つは、帰還兵詩人が、戦後10年、20年を経ても、この戦争についての詩を書き続けてきたこと、それを詩集として発行し続けてきたことにある³⁾。*Winning Hearts and Minds (WHAM)* 刊行以後、次々に出版され続けた元兵士による詩集の中には、1994年に詩の分野でピュリッツァー賞を受けたYusef Komunyakaaの*Neon Vernacular* (Wesleyan, 1993)をはじめとして、アメリカ現代詩部門における数々の受賞作品がある。戦争を語る詩の場合は、Tim O'BrienやLarry Heinemann, Philip Caputoらの小説ほど世間から注目されることはないが、帰還兵の詩は、今ではベトナム戦争文学を語る上でなくてはならない位置を占めていると言える⁴⁾。かれらが戦後数十年を経ても詩を書き続けている背景には、ベトナムシンドローム（ベトナム戦争候群）から立ち直れない米国社会が、軍事大国としての自信を取り戻すために、ベトナムでの敗北から10年もしないうちに始めた中米のグレナダやパナマへの侵攻作戦（1983、1989）、ブッシュ（父）大統領が開始した湾岸戦争（1991）、9.11直後のアフガニスタンへの空爆による報復攻撃（2001）、それに続くイラク戦争（2003）と、戦争大国として今なおその軍事力を行使し続ける米国の実態がある。帰還兵詩人たちは、ベトナム戦争から何も学ぼうとはしない米国政府と軍部、それを支える社会に対して厳しく冷静な目を言葉に置き換える手を決して休めようとはしなかった。

*Winning Hearts and Minds*から出発した帰還兵詩人の多くが、Vietnam Veterans Against the War (VVAW ベトナム戦争に反対する帰還兵士の会)の会員であったことから、詩を書くことでこの戦争の本質を世間の人びとに知らせようとする元兵士たちの強い意志を読み取ることができる。しかしそのことは、かれらの詩が結果的には反戦に繋がる内容となっても、最初から政治的な反戦意識のもとに反戦詩人として詩を書いたことを意味しない。*Winning Hearts*

*and Minds*から生まれた代表的詩人の一人、W. D. Ehrhartは、ここに掲載されている作品のほとんどが詩というよりも、これ以上己の内に溜めておけない兵士の怒り、悲しみ、心の痛みをそのまま声にしたものと言う。*WHAM*には、作品が書かれた年代順に収められているので、詩作経験の浅い帰還兵が時間的経過とともに詩人としての成長を見せているとも評されている。怒りや悲しみの生のままの発露であるとしても、それ故にこそ読者は「本当の戦争」がどのようなものかを作品から感じ取ることができるのではないだろうか。(以下、全文引用とある作品以外は部分引用である。)

戦争の恐怖、怒り、悲しみ

プラスチックの死体袋 (body bag) は兵士にとって戦争の恐怖の象徴であり、そのような死を強要するものへの怒りと直結している。タイトルが、“Dick Nixon, I Am Lt. John Stulett, U.S. Army, 1st Cav. Div.” とそのまま一陸軍中尉からニクソン大統領に宛てた手紙となっている作品がある。戦場に送られた兵士は自分が、安全な側、米国内に留まっている者たちのために、戦いの意味も知らされずに無駄に死んでいくようなものだとの怒りを、皮肉とともに訴えている。(作者は1971年に戦死。DickはRichardの愛称。)

We could suffer for your eyes too, Dick. But would you trade / them for dead eyes in a second? You ask us over here to do it for you over there / for nothing.

What does it mean? / We'll end the war with honor, you say Dick?

Dying while we stand in line to leave is just like dying for / no reason at all. . . .

(*WHAM* 60)

同様に、“Walk” (Charles M. Purcell) と題された次の詩は、死体袋が悪夢と重なる恐怖を表現している。帰還後、自宅付近を歩いていると、路上に置かれている緑色のゴミ袋の山が目に入る。戦場では、ポンチョで作られた緑色の死体袋から両足が突き出たままで並べられていたことを思い出し、そこから一気に戦場の悪夢へと引き戻される。70年代に入ると、兵士の怒りはテレビ画面から笑顔を振りまくニクソン大統領に集中的に浴びせられる。これまで並べ立てられてきた嘘の数と同じくらいに沢山の、路上に積み上げられているゴミ袋を戦場に送り出し、その代わりに戦友の遺体をそれぞれの故郷に送り返してくれという声は、兵士たちを騙し続けてきた者への率直な怒りとなっている。

In the quiet dignified houses Nixon flashes on T.V.

Smiling his asinine smile and waving his asinine wave

While men lie along the road like so much garbage.

If only a trade could be made / Send the garbage and leaves to Nam

Send the corpses to suburbia.

(*WHAM* 107)

次に挙げるのは、戦場に送られた兵士が、国旗や教会のお偉いさんたちの教を鵜呑みにした結果がこれだと悟ったときのやり切れなさをそのまま言葉にしたJulian Knasterの“i fail to be

mesmerized” という作品。しかし一体、大統領は、犠牲になったもののために一度でも涙することなどあるのだろうか。疑うことを知らなかったことへの深い後悔の念である。

i fail to be mesmerized / by the american flag, / or churches / or temples,
or synagogues, / or men no better than i / or you / . . .
i wonder if at times / the president / ever takes a moment to weep.

(WHAM 108)

Michael Caseyの作品“On Death”からの最後の一行。ベトナム人の子どもも大人も行き来する路上に置き去りにされたままの、腸がドロッと流れ出て、性器も千切れて飛び散り、蠅がぶんぶんとたかっている、おそらくはベトコンと呼ばれたゲリラの死体を目にした。その時は見慣れた光景に何も感じなかったが、ある時ふと、自分もあのような惨めな姿で人目に晒されるのだろうかかと想像したときのいたたまれなさ、その恐怖を“a Public obscenity”が強烈に代弁している。

I don't want in death to be a Public obscenity like this. (WHAM 55)

WHAMの編者の一人であるBasil Paquetは、戦友の死への思いを“Morning—A Death”に込めている。これはWHAMのなかでもっとも高い評価を受けた作品の一つであるだけでなく、その後出版される何冊ものベトナム戦争の詩のアンソロジーに必ずといってよいほど収録されている帰還兵詩人の代表作でもある。瀕死の友に懸命の救命手当を試みるも、友の乾いた唇から息はもどってこなかった。遺体を生温くなったビールで拭いて死体袋に押し込んだが、友の臭いは自分の身体に染みついたままだった。戦場での悲しみを嗅覚にまで訴えてくる作品である。

You are dead just as finally / As your mucosity dries on my lips
In this morning sun. / I have thumped and blown into your kind too often,
I grow tired of kissing the dead. . . .

I grow so tired of jostled litters / Filling the racks, and taking off
Your tags and rings, pulling out / Your metal throats and washing
Your spittle down with warm beer at night,
So tired of tucking you all in, / And smelling you all on me for hours.

(WHAM 22-23)

戦友の死、その悔しさを作品にしたものは多いが、David V. Connollyの“*No Lie, GI*”は、戦場での友情をブラックユーモア風に描くことで、さり気ない言葉のやり取りの裏に溢れる両者の「非情な思いやり」とも言うべき信頼関係を感じさせる。政府や軍部に騙され、裏切られたと思っている兵士たちは、それ故にこそ、仲間同士では絶対に嘘をつかないことが暗黙の誓いとなっていた。Connollyは陸軍第11機甲部隊所属の歩兵として従軍し、帰還後はVVAWの会員として詩を書き続けている。

We had a deal, he and I, of no bullshit between us.
If one of us got wounded, / the other wouldn't lie.

So when he got hit / and he asked me, "How's my leg?"
 I looked him straight in the eye / and told him, "It's fine."
 It looked fine to me, laying over there, looked as good as new.

(*Lost in America* 20)

W. D. Ehrhartは、高校卒業と同時に、家族の反対を押し切って海兵隊に志願入隊した。訓練直後にベトナム派遣となるが、その数ヵ月後にはこの戦争の残虐性に嫌気がさし、入隊当時の、「自由の防衛のために命をかけること以上に尊い使命はない」という無垢な愛国心が裏切られたこと、そして未来への希望を奪われてしまったことへの若者の怒りを“Fragment: 5 September 1967”という作品に吐き出している。

And youthful dreams lay dead / Amid spent cartridges and broken bodies
 Littering the earth.
 After that, there was no innocence; / And there was no future to believe in.

(*WHAM* 33)

編者の一人、Larry Rottmannの“APO 96225”*には、兵士とその家族との手紙のやり取りの難しさ、戦場とそこで戦う兵士に対する本国の人びとの無理解無関心を遠回しに示している。一見ユーモラスな書き方だが、底に流れる痛烈な米国社会への批判を見逃せない。

When he had time, he wrote home and said, / “Sure rains here a lot.”
 But his mother, reading between the lines,
 Wrote, “We’re quite concerned. Tell us / what it’s really like.”
 So the next time he wrote, / “Today I killed a man.
 Yesterday I helped drop napalm on women and
 children. Tomorrow we are going to use / gas.”

* Army Post Office 番号

戦地からの通り一遍の手紙に対して、息子を案ずる母親は、本当のことを書けという。それならと、敵を殺したり、子どもがいる村にナパーム弾を落としたりと、戦争の実態を書き綴ると、父親は、そんな手紙は母さんにショックを与えるだけだ、と言ってきた。結局、息子の戦場からの手紙は差し障りのない元の内容に戻ってしまった。

So, after a while, the young man wrote, “Sure rains a / lot here. . .” (*WHAM* 9)

ケイジンが指摘するように、ベトナム戦争文学の主題はそれ以前の戦争文学の主題とは「完全に別種」のものなのだろうか。無益な戦争に送り出した者たちへの兵士の怒りや、それとは逆に、負傷兵、とりわけ精神的後遺症に苦しむ帰還兵に米国社会が向けていた無視にも等しい態度は、なにもベトナム戦争に限られたことではなかった。しかし、あえてベトナム戦場に送り込まれた平均19歳の若者たちの怒りの根源を特徴づけるならば、第一に、1971年に政府内の秘密報告書とされてきた『ペンタゴン・ペーパーズ』（国防総省白書）の内容が暴露されたことや、元国防長官が『マクナマラ回顧録』（1997）で告白しているように、この戦争があまりにも多くの嘘で塗

り固められていたこと、第二に、「良い戦争」と呼ばれた第二次大戦から帰還した父親世代の兵士が英雄視され戦勝パレードでその帰還を歓迎されたのとは対照的に、敗戦の責任を転嫁され、帰国後も社会から疎外され続けたこと、第三に、泥沼化した戦場で死んでいった戦友に対しての負い目、自分だけが生き残ったことへの罪悪感が挙げられる。社会からの疎外感に加え、これまで当然のことと信じていたことや人びとへの幻滅、失望が、ベトナム帰還兵たちを詩作に向かわせるマグマとなっていた。WHAMから出発し、以後、精力的に作品を発表し続けているEhrhartの“A Relative Thing”（1972）はその複雑な怒りを次のように書き表している。

We are the ones you sent to fight a war / you didn't know a thing about.

It didn't take us long to realize / the only land that we controlled
was covered by the bottoms of our boots.

.....

When the newsmen said that naval ships / had shelled a VC staging point,
we saw a breastless woman / and her stillborn child. . . .

We have been Democracy on Zippo raids, / burning houses to the ground,
Driving eager amtracs through new-sown fields. . . .

We are the ones you sent to fight a war / you did not know a thing about—
those of us that lived / have tried to tell you what went wrong.

Now you think you do not have to listen.

.....

We are your sons, America, / and you cannot change that.

When you awake, / we will still be here. (Carrying the Darkness 95-97)

ここでの“relative”を作者自身は、「友人は選ぶことができても、血のつながりは選べない」という諺に基づくと説明する。あなたたちが目を逸らしているこの戦争、この戦場に送り込まれたわれわれ兵士は、それでもあなたたちの息子なのですよ、の意。ベトナム民衆に対して米兵が行った残虐行為を赤裸々に告白した作品はこれに限らないが、この作品では戦場での米兵の犯した行為、それがために苦しむ兵士、戦死した若者たちとまともに向き合おうとしない米国社会への怒りを、帰還兵が無視され疎外されることへの抗議として、声にしたものである。最後連にある“sons”については、血縁に訴えるような表現が愛国心の強調とも受け取られ、むしろ保守派に歓迎されるような誤解を招いたとの指摘もある。この点は、1980年代に大ヒットしたロック・アーティスト、ブルース・スプリングスティーンの“Born in the U. S. A.”の歌詞が、「強いアメリカ」の復活を唱えた共和党のレーガン大統領支持層に同様の解釈をされたこととも共通している。また、“sons”が男性兵士に限定されることについては、Ehrhart自身、これを作詩した時点ではベトナムに1万5000人の米国人女性が従軍していた事実への認識がなかったことを、かの女たち自身の詩集Van Devanter and Furey, eds., *Visions of War, Dreams of Peace* (1991) が出版されたときにその序文で詫びている。“A Relative Thing”の発表から19年後のことである。

ベトナム民衆とその文化への眼差し

戦争終結前に出版された *WHAM* の中には、兵士たちの死への恐怖、仲間を失ったことの悲しみや、自分たちをこの戦争に送り込んだ者たちへの怒りだけではなく、敵兵であるゲリラや民間人を自分たちと同じ人間として見つめた作品も数多く含まれている。1966年から67年に陸軍軍医として従軍した Herbert Krohn の詩は、常にベトナム民衆とかれらの生活をテーマとしていた。次の “Farmer’s Song At Can Tho” は、実直なベトナム人の、農夫としての誇りと嘆きを詠んだものである。

What is a man but a farmer / Bowels and a heart that sings
 Who plants his rice in season / Bowing then to the river.
 I am a farmer and I know what I know. / This month’s harvest is tall green rice.
 Next month’s harvest is hordes of hungry beetles.
 How can peace be in a green country? (WHAM 91)

同じく Krohn の “Letter and Conversation” は、ベトナム人娼婦から米兵に宛てた手紙の形式をとっている。

Do you have “my* wife” in States? / How long you stay Saigon? / Maybe ti-ti*.
 Maybe beaucoup. / I like you too much. / And I no say I love you too much!
 Next time you come to *New York Bar* / I love you too much.
 Now you buy me Saigon tea*?

 My darling, / I write to you this letter / by many small candle
 then I cry many sweat. / You see where they fall / on my letter?
 Maybe after one year you go back States—
 no sweat. / Maybe V.C. fini you— / I be very sad. (WHAM 79)

*my : アメリカ、ti-ti : 少しだけ、Saigon tea : バーでGIが娼婦に高額で売りつけられる非アルコール飲料、V.C. : 「ベトコン」ゲリラ

敵のゲリラ兵士に対しては、その眼差しも複雑だった。恐ろしい敵ではあるが、その恐ろしさとは、誰が敵なのかわからないことにあった。民間人とゲリラとの区別がつかない。子どもから老人、女性まで、誰もかれもがベトコン兵士に見えてくる。抵抗を決して止めようとはしないベトナム人への半ば畏怖にも近い恐怖を、最後にはユーモアを滲ませて表現したのが、Ehrhart の “Guerrilla War” である。

It’s practically impossible / to tell civilians / from the Vietcong.
 Nobody wears uniforms. / They all talk / the same language. . . .
 Even their women fight; / and young boys, / and girls.

It's practically impossible / to tell civilians / from the Vietcong;
After a while, / you quit trying. (Carrying the Darkness 93-94)

ベトナム民衆の誰もがベトコンで、敵かもしれないという恐怖は、かれらの自由を守るためにここに来て戦っているのに、なぜ憎まれなくてはいけないのか、我々は何のために戦っているのか、という疑問に繋がっていく。David Connollyの“The Guerrilla”は、その疑問を突き詰めていくと、自分たち米兵が侵略者であることを認めざるをえなくなると告白している。ここでのHisとは、ホーチミン、または米軍と戦うベトナム人を象徴しているであろう。北ベトナム兵や南ベトナムのゲリラと比べると戦闘意志の低い南ベトナム政府軍兵士。潤沢な武器弾薬と食糧、しかし戦争目的には自信のないわれわれ外からの侵入者。戦いの大義をもつかれらとそうでない自分たち、と、対比は明確である。

His people were dying daily / to free their land.
I fought for people who / would not fight for themselves
His war was against foreigners, / better armed and fed, but without his conviction.
I saw very quickly / that we were the invader.
His people supported him; / he gave himself to them and they to him.
I was hated / by the people I fought for. . . .
(Lost in America 62)

この戦争が侵略戦争であることについては、米軍がまだ軍事顧問団の名目で南ベトナムに駐屯していた1962年にすでに陸軍兵として従軍したJan Barry (WHAMの編者の一人) が、“In the Footsteps of Ghenghis Khan”の中で明らかにしている。ベトナムの歴史を辿りながら、かつてこの地を支配しようとしたモンゴル、のちの中国、フランス、日本の支配に続いてやってきたのが米国人だった、と。

We went about our military duties, / setting up special forces headquarters
where once a French Foreign Legion post had been, / obvious to the irony
of Americans walking in the footsteps / of Genghis Khan.
Unencumbered by history, / our own or that of 13th-century Mongol armies
long since fled or buried / by the Vietnamese,
in Nha Trang, in 1962, we just did our jobs:
replacing kepis with beret, “Ah, so!” with “Gawd! Damn!” (WHAM 6)

*Kepi：フランス陸軍兵の帽子；beret：米陸軍特殊部隊のベレー帽

Barryは、“Thap Ba”という作品では、アジアの伝統ある文化を近代兵器で破壊することの愚を嘆いてもいる。わずか二十歳の米軍ヘリ操縦士が、千年の歴史をもつチャム族の寺院を撃破して有頂天になっている姿は、そのままベトナム民衆への米国による軍事力行使の実態と重なってくる。(全文引用)

The old Cham temple of Thap Ba, / the local say it's a thousand years / old,

older than this stilted Anglo-/ Saxon language I use
 Older they say than the use of bullets, ballots, and the printing / press
 older than the air plane and the bomb older than napalm
 was hit yesterday by a twenty-year-old / helicopter pilot / fresh from the states
 Who found it more ecstatic than the firing range / for testing his guns

(WHAM 51)

ベトナム民衆は生活の中で詩に親しむ文化と伝統を大切にす。WHAMの編者でもあり、小説家としても活躍しているRottmannは、戦後何度もベトナムを訪れ、村落を歩き回っては人びとから民話や戦中戦後の苦労話の聴き取りを行った。1993年にはそうした話を収めた*Voices from the Ho Chi Minh Trail*を発表している。次に引用する“A Porter on the Trail”は、Rottmann自身が聴き取った実際にあった話、詩を愛好するベトナム人の体験談を、その人物に成り代わって、詩に再生した作品である。戦争中、ホーチミン・トレイル（ルート）を南北に行き交う配達人をしてきたこのベトナム人兵士は、行く先々で詩の読み聴かせをしていた。彼がいづも持ち歩いていたのは、ホイットマン詩集だった。

In 1966, / when I started down the trail, / I carried a copy of
The Poem of Walt Whitman in my rucksack.

I am not a learned man, / and I know only / two poems by heart:

“Kim Van Kieu,”* and “Song of Myself.”

*ベトナムの英雄の叙事詩

“Kieu”のことはベトナム人の誰もが知っていたが、ホイットマンの“Song”（「ぼく自身の歌」『草の葉』所収）を語り合える同志は少なかった⁵⁾。ところがある日、ケサンの近くでGIを捕虜にしたので、早速尋ねてみた。しかしこの米国人兵士は“Song of Myself”をまったく知らなかった、という話である。戦争中に、しかも敵国の詩人の詩の読み聴かせをする兵士を抱えたベトナム社会の余裕、その文化の懐の奥深さを感じさせてくれる。土と水のあるところならどこにでも生えてくる草、その自然の普遍の営みを詠んだ詩人をもつ国がどうして人を殺傷するナパーム弾や自然を破壊する枯れ葉剤を作れるのだろうか。素朴な疑問は、ベトナムの詩人兵士の嘆きでもある。

I wondered / how a nation / that gave birth to Walt Whitman
 could also produce / napalm and Agent Orange.

He wrote, / “This is the grass that grows / wherever the land is and the water is,

This is the common air / that bathe the globe.”

(Franklin, *The Vietnam War* 223)

視点の転換—子どもの眼差し

本稿で何度か引用した帰還兵詩人Ehrhartの初期の作品“Full Moon”には、彼が海兵隊員としてベトナムに派遣された直後の正直なベトナム人観が表れている。昨夜のパトロールで敵に出く

わしたが、月明かりの下では、とても敵－人間－には見えなかった、と。

Strange, in the bright moon / He did not seem an enemy at all.

He had arms and legs, a head. . . . and a rifle. / I shot him.

(WHAM 14)

帰還後、それも戦争終結の年に、詩人が一気に書き上げたのが“Making the Children Behave”である。ここでは上記の作品とは視点が180度転換している。はじめは人間とは考えてもみなかった敵。しかし今では、ベトナム人、とくに子どもたちの目には、余所者の自分たちの方がよほど化物に見えていたのではないか、と思っている。(全文引用)

Do they think of me now / in those strange Asian villages
where nothing ever seemed / quite human / but myself
and my few grim friends / moving through them / hunched / in lines?

When they tell stories to their children / of the evil

that awaits misbehavior, / is it me they conjure? (Carrying the Darkness 97)

戦後、1985年にはじめてEhrhartら帰還兵詩人はベトナムを再訪し、ベトナムの詩人との交流の機会をもった。そこではじめて分かったことは、かれらが米国の歴史と文化を实によく勉強していることだった。先に引用したホイットマン詩集の愛読者を例に挙げるまでもない。懇談の場で一人の老齢の詩人が“Making the Children Behave”のベトナム語訳を取り出して、この作者は誰かと尋ねた。Ehrhartが自分だと答えると、その詩人Te Hanhは、『ベトナム文学』と英文で書かれた分厚い詩集を開き、一篇の詩を指し示して、それを読んでほしいと言った。“Questions Underground”という題の詩だった。そこには戦争中地下トンネルで暮らした南ベトナムの子どもの目線からの米兵イメージが描かれていた。その子どもたちが頭の中で描いていた米兵とは、まさにEhrhartが想像していた通りのものだった。

When there are no more bombs to the children of the South,
shall I be let to go on the earth again?

Why do you ask, little one. . . / I want to see the sky, Mother, are the clouds blue?

. . . .

When there are no more bombs, / shall you let me go up on the earth again?

Why do you keep asking, little one. . . / I want to see the Yankee,

Mama, does it look like a human being? ⁶⁾

Te Hanhは、当時、ベトナムでもっとも敬愛されていた詩人の一人で、その名は米国の帰還兵詩人たちにもよく知られていた。敵味方として戦った、文化のまったく異なるベトナムと米国の双方から、期せずして、この戦争を子どもの視点から捉えた作品が生み出されていたのである。

1972年に帰還兵によるベトナム戦争詩の最初のアンソロジーとして出版されたWHAMの最初の頁には、「インドシナの子どもたちへ」との献辞がある。ここに掲載された詩人たちの心の片隅にはいつも、ベトナムの、ラオスの、カンボジアの子どもたちの眼差しがあったのだろう。WHAM所収の作品の作者の多くが、初期には戦場での自身の怒りや悲しみをそのままろくに吐

き出したような詩作から、しだいに詩としての作品の成長を見せてきたと言われる。その成長とは、何のために戦うのか目的もはっきりしないままに戦場に送り込まれ、子どもまでも平然と殺してしまう殺人マシンに仕立てられたことへの怒り、さらには大義なき戦争の使い捨てにされようとしている哀れな犠牲者としての自己憐憫や被害者意識から、侵略者としての自覚、認識にいたった、その視点の転換にあったと思われる。この視点の転換こそが、帰還兵詩人をして、この残酷な戦争の実態を、そしてこの戦争がまだ続いている現実を自国の人びとに知らせる行為へと向かわせた。詩作の過程でかれらは、自身が抱く怒りや悲しみ等の直線的な感情表現から、侵略される側への創造力を膨らませることで戦争の全体像を描き出すための、より洗練された表現方法を獲得していったのだろうと考えられる。

帰還兵詩人とベトナム戦争

ベトナム帰還兵詩人の作品を読んでいくと、繰り返しになるが、かれらに詩を書かせた原動力が、この不正義の戦争、戦場に自分たちが送り込まれたことへの怒り、この戦争とそこで戦ってきた兵士にまともに向き合おうとはしない社会への幻滅と憤りにあったことがよく分かる。本文中にもその作品を引用した詩人W. D. Ehrhartは、この戦争が嘘で塗り固められたものだと知ったときの衝撃を次のように書いている。「俺はバカだった。無知でお人好しだった。ペテン氏、そんな奴らのために、俺は殺人者となってしまった。そんな奴らのために、おのれの名誉、自尊心、人間性まで失ってしまった。そんな奴らのために、命まで投げ出そうとしていた。」⁷⁾ この「自尊心」を“my precious idealism”⁸⁾と表現した帰還兵もいる。これらの言葉は、1960年代にベトナム行きを志願した多くの若者たちの腹の底からの怒りの叫びを代弁していた。60年代の米国社会は、若者たちがその理想主義に燃えた愛国心を育むだけの土壌を十分に備えていた。かれらの父親世代は、「良い戦争」と呼ばれた第二次世界大戦の英雄であり、華々しい戦勝パレードが復員兵士たちを歓迎した。その息子たちは、米国の正義は世界の正義であり、その正義と民主主義を守ることが米国民の務めとの自覚を幼い頃から植えつけられてきた。そしてかれらを志願兵としてベトナム戦場に向かわせた、その背中を押したのが、「国があなた方のために何ができるかではなく、あなた方が国のために何ができるのかを問うてほしい」という第35代ケネディ大統領の有名な就任演説（1961）の一節だった。つまり60年代の若者が抱いていた理想主義的な愛国心は、米国は世界の指導者であり、民主主義社会の模範であるというアメリカ神話を拠り所としていたのである。

ベトナム戦争は米国史においてもっとも論争の絶えない戦争であり、今でもさまざまに引き合いに出され、その教訓とは何かが問われている戦争である。それは、ベトナムでの敗北が、それまでのヨーロッパ系白人中産階級男性の価値観を中心とした伝統的な米国史像の限界を明らかにした、つまりアメリカ神話の崩壊へと導いたからであった。ベトナム戦争の終結は、多文化主義的思考が従来の伝統的価値観に取って代わり、新しい米国史像の模索の始まりを意味した。しかしこの道のりは実際それほど単純なものではなかった。1950年代に台頭したアフリカ系アメリカ人による公民権運動、60年代に開花した第二波フェミニズム、国内でのベトナム反戦運動の高揚が相互に作用し合い、激動の60年代を作り上げたのだ。この複雑で自己変革をも求められる

困難なプロセスを、ベトナムに送られた若者たちは、戦場での個人的体験をもって一気に駆け抜けたことになる。しかもかれらの思想的支えとなっていたのはアメリカ神話に根ざした理想主義と愛国心であった。その精神的重圧と緊張は想像を絶するものであったろう。米国社会全体が直面したアメリカ神話崩壊の歴史的局面に、ベトナム戦場では兵士一人ひとりが怒りや悲しみ、絶望を抱えながら立ち向かったということである。

兵士によるベトナム戦争詩は、ベトナム戦争から生まれた数々の映画や音楽、小説などの作品のなかでももっとも予想のつかなかったものだという⁹⁾。詩はエリートの特権品という固定観念からであろう。しかしやむにやまれぬ心の叫びを言葉に置き換えた兵士の詩は、今なお海外での戦争を続けている米国社会で静かに読み継がれている。Ehrhartは、詩の浄化作用について、次のように言う。「詩がこの国を浄化してくれることを願う者がいても、それはほとんど期待できないだろう。しかしより現実的に考えると、詩を書くことで詩人は少なくとも〔ベトナム戦争で傷ついた、今も苦しんでいる〕自身の心を浄めることはできる」と¹⁰⁾。ベトナム帰還兵の詩がその読み手に何らかの浄化作用をもつとしたら、それはかれらが戦場で覚えた怒りを犠牲者意識として内に向けるのではなく、ベトナム民衆の眼差しから逃げることなく戦争の真実を受け入れようとするエネルギーに変えたことへの感動ではないだろうか。ケイジンがベトナム戦争文学に見出そうとした「完全に別種の主題」とは、帰還兵詩人たちが切り拓いてきた新たな戦争文学の可能性だと言えよう。

注

- 1) ベトナム戦場から現地特派員として活躍した代表的なジャーナリストとその作品には次のものがある。David Halberstam, *The Making of a Quagmire* (1965, 泉鴻之／林雄一郎訳『ベトナムの泥沼から』みすず書房, 1968); Francis FitzGerald, *Fire in the Lake: The Vietnamese and the Americans in Vietnam* (Little, Brown and Co., 1972); Gloria Emerson, *Winners and Losers: Battles, Retreats, Gains, Losses and Ruins from a Long War* (Random House, 1972); Neil Sheehan, *A Bright Shining Lie* (Random House, 1988, 菊谷匡祐訳『輝ける嘘』集英社, 1992)。
- 2) アルフレッド・ケイジン「戦争とアメリカ社会—文学の視点から—」小川晃一／石川博美編『戦争とアメリカ社会』（アメリカ研究札幌クールセミナー第4集）木鐸社, 1985年, 99-123頁。
- 3) WHAM以後の帰還兵詩人の作品を取めた主たるアンソロジーには、以下のものがある。Jan Barry and W. D. Ehrhart, eds., *Demilitarized Zones: Veterans after Vietnam* (1976); W. D. Ehrhart, ed., *Carrying the Darkness: The Poetry of the Vietnam War* (Lubbock, TX: Texas Tech University Press, 1985), idem, ed., *Unaccustomed Mercy: Soldier-Poets of the Vietnam War* (Texas Tech University Press, 1989); Lynda Van DeVanter and Joan A. Furey, eds., *Visions of War, Dreams of Peace: Writings of Women in the Vietnam War* (Warner Books, 1991); H. Bruce Franklin, ed., *The Vietnam War: In American Stories, Songs, and Poems* (New York: St. Martin's Press, 1996); Kevin Bowen and Bruce Weigl, eds., *Writing Between the Lines: An Anthology on War and Its Social Consequences* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1997)。
- 4) ベトナム戦争文学の代表的な作品として次のものがある。Tim O'Brien, *The Things They Carried* (1990, 村上春樹訳『本当の戦争の話をしよう』文春文庫, 1998); Larry Heinemann, *Paco's Story* (1986); Philip Caputo, *A Rumors of War* (1977)。
- 5) 杉木喬／鍋島能弘／酒本雅之訳『ホイットマン詩集 草の葉』岩波文庫, 初版1969), 97-229頁。

- 6) W. D. Ehrhart, *Going Back: An Ex-Marine Returns to Vietnam* (Jefferson, North Carolina and London: McFarland and Company, 1987), p. 82; 白井洋子「ベトナム再訪からの『発見』—帰還米兵と戦場体験—」『歴史書通信』168 (2006年11月号), pp. 2-4.
- 7) W. D. Ehrhart, *Passing Time: Memoir of a Vietnam Veteran Against the War* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1986), p. 172; 白井洋子『ベトナム戦争のアメリカ—もう一つのアメリカ史』刀水書房, 2006, 123-124頁.
- 8) Ricard Stacewicz, *Winter Soldiers: An Oral History of the Vietnam Veterans Against the War* (New York: Twayne Publishers, 1997), p. 360.
- 9) Franklin, ed., *The Vietnam War*, p. 221.
- 10) W. D. Ehrhart, *The Madness of It All: Essays on War, Literature and American Life* (Jefferson and London: McFarland & Company, 2002), p. 127.

詩の引用出典：

- Connolly, David. *Lost in America*. Viet Nam Generation, Inc. & Burning Cities Press, 1994.
- Ehrhart, W. D., ed. *Carrying the Darkness: The Poetry of the Vietnam War*. Lubbock, TX: Texas Tech University Press, 1985.
- _____. *Going Back: An Ex-Marine Returns to Vietnam* (Jefferson, North Carolina and London: McFarland and Company, 1987).
- Franklin, H. Bruce, ed. *The Vietnam War: In American Stories, Songs, and Poems*. New York: St. Martin's Press, 1996.
- Rottman, Larry, Jan Barry and Basil Paquet, eds. *Winning Hearts and Minds: War Poems by Vietnam Veterans*. 1st Casualty Press, 1972.